

2016 年 2 月 8 日
総合教育会議資料

小中一貫教育学校の評価・検証について（概略版）

1 興本扇学園の検証内容

（１）現状

- 校長や教職員の異動や校舎分離型などの影響で、創設当初の自覚的、意欲的な小中一貫教育の取り組みは近年薄れているが、日常的に小中学校の教員、児童生徒の交流は様々に行われている。
- 小中一貫教育学校の枠組み（5-6 学年の教科担任制、国際コミュニケーション科、異学年交流など）を活用した取り組みも課題を抱えながらも継続している。
- 小中一貫教育学校の目的とその基本的システムや潜在的メリットを生かした取り組みは、校舎分離型の問題点もあり厳しい状況にある。
- 校舎分離型（東校舎（1-4 学年） 西校舎（5-9 学年））により、小中一貫教育の取り組みは、西校舎をベースに行われている。
- 東校舎は、1-4 学年のため他の通常の小学校より落ち着いた雰囲気がある。西校舎の 5-6 年生は、「小学校高学年にも拘わらずリーダーシップが育たない」「幼い」等の課題がある。（7 年生は中学生の自覚が薄い）【小 5 ギャップ】

生活指導面

- 1) 部活動・・・5-6 年生の部活動参加は定着している。（参加率 65%）

学習指導面

1) 教科担任制（小学校高学年）

小中一貫教育を表明していることもあり、何とかやりくりし形として（学年内）維持してきた。

→ 興本扇学園の中学担当教員の授業持ち時数が非常に多く、時間的余裕がない

2) 異学年交流を生かした学力向上の取り組み

中学生が教える側となって小学生の個別指導等が定着している。

3) 教員の授業交流

小学校の授業に中学校の教員が参加（教科を中心とした小中の授業研究）

4) 国際コミュニケーション科

英語学習、国際理解、環境教育（ユネスコスクール）、日本文化学習を柱に取り組んでいる。校長の評価は、必ずしも十分ではないと考えているが、各担当教員の努力により継続できている。

(2) 成果と課題

生活指導面

1) 児童生徒の全般的状況

- 中学生に進学後、新たに不登校、欠席しがちな生徒はいない。
- 小学校から不登校気味、欠席しがちな児童は学年で 2～3 名。小学校では、学級担任制であるため、生活指導面での情報の共有化が十分でない傾向があり、小中一貫教育の取り組みを活用しきれていない。
- 8-9 年生は落ち着いて学習に集中でき、中学校での問題行動は少ない。
- 運動会や学芸会などの行事を小中合同で行う。小学生は中学生を手本に、逆に中学生は小学生にみられることで、良い相乗効果がある。

2) 興本小学校から扇中学校への進学率

- 近年、確実に上昇している。教育活動に対する地域の信頼と支持は拡大している。
(平成 17 年度 53% → 平成 27 年度 81%)

3) 児童生徒と教員の意識 (小中一貫校意識調査【平成 26 年度】より抜粋)

● 児童生徒の意識

「学校に行くことが楽しいか」「自分のよいところを伸ばそうとがんばっているか」
→ 中学年、特に、7 年生で「あまり」「全く」が増加する傾向。8-9 学年で「とても」「やや」が回復しているのは、中学年生の「中だるみ」と高学年の「伸び」という小中一貫学校の特徴と捉えることができる。

● 教員の意識調査

「小中一貫教育を通して、自身の児童・生徒への理解や見方は変わったか」
→ 「とても」、「やや」変わったとする回答率が増加。一方で、「あまり変わらなかった」、「全く変わらなかった」の割合も 30 数%ある。

(原因) ○ 小学校教員が「変わらなかった」とする回答率が全体的に高い

○ 東・西校舎に分かれ東西校舎間の一貫教育の取り組みも希薄で、東校舎(1-4 学年)の教員は小中一貫教育の取り組みを意識することが少ない。

また、小学校の学級担任制と中学校の教科担任制などいわゆる「文化」的差異によることも考えられる。

「異学年交流で児童生徒の成長に変化が見られたか」

児童生徒が成長していると評価する率が高くなっている傾向があるが、成長の変化がないとする率も一定割合ある。

(原因) 東・西校舎に分かれ一貫教育の取り組みの希薄さという原因の可能性あり。

「小中一貫教育導入後の中学校段階への適応についてどう感じるか」

小学校から中学校への円滑な移行に関しては、年度毎の変動はあるが、経年変化の傾向から児童の中学校への適応がスムーズになっている。

学力指導面 (区基礎学力定着調査の結果データより)

1) 小学校の低学年では区の平均に比べて学力が低いところがあるが、学年を重ねる

につれて学力が高くなる傾向がある。中学校では学力の伸びが顕著である。

2) 英語の学力の伸びが著しい。

全国学力調査結果からも区の学力調査結果と同様の傾向が確認できる。

- 平成 26 年度 通過率
興本小：国語（58.4）算数（66.2）→扇中：国語（65.6）数学（52.5）
《伸び率》国語（112.1%）算数・数学（79.3%）計 **94.7%**（区平均は 77.7%）
- 平成 26 年度 正答率
興本小：国語（70.4）算数（74.3）→扇中：国語（68.2）数学（59.0）
《伸び率》国語（96.9%）算数・数学（79.4%）計 **87.9%**（区平均は 82.8%）
- 平成 27 年度 通過率
興本小：国語（76.1）算数（79.4）→扇中：国語（58.6）数学（62.6）
《伸び率》国語（76.9%）算数・数学（78.9%）計 **77.9%**（区平均は 72.2%）
- 平成 27 年度 正答率
興本小：国語（77.5）算数（82.8）→扇中：国語（67.7）数学（67.4）
《伸び率》国語（87.3%）算数・数学（81.4%）計 **84.2%**（区平均は 81.2%）
- 英語の学力が高い（平成 27 年度調査）
通過率：中学 2 年（**64.8%**）→中学 3 年（**72.0%**） 【区平均 中 2（46.7%）→中 3（51.2%）】
正答率：中学 2 年（**65.4%**）→中学 3 年（**71.8%**） 【区平均 中 2（52.0%）→中 3（40.6%）】

足立区基礎学力に関する総合調査より

3) 児童生徒と教員の意識（小中一貫校意識調査【平成 26 年度】より抜粋）

●児童生徒の意識調査

「毎日の授業がわかるか」

→ 授業理解や国際コミュニケーション科に対して、肯定的に評価する割合が一般的に高い傾向にある。

●教員の意識調査

「一貫校を開校後、以前と比較して指導内容・方法の工夫・改善をしたか」

「小中一貫教育が導入されてから、学力についてどう感じるか」

「国際コミュニケーション科の実施で望ましい変化が見られたか」

→ 指導内容・方法の改善や合同研究などの評価は分かれている。また、教員は、学力の向上についてはそれほど成果が上がっていないこと、国際コミュニケーション科については 3-4 割が児童生徒の望ましい変化があったと見ているが、6 割近い教員はあまり変化がなかったと評価している。

2 新田学園の検証内容

(1) 現状

- 小中一貫教育学校の枠組みとメリットが、2 校舎体制により低減した。
- 創設時に入学した児童が 27 年度 6 年生として卒業する。28 年度から中学生になるため、厳密には来年度以降からの検証がより重要になる。
- 教科担任制は、6 学年の最後に授業を体験させるという形態であり、期の教科担任

制は実質的には行われていない。

- 中学校教員の授業持ち時数が多い
- 児童生徒数が多いため、学校行事等での移動や複数開催など、準備に多くの時間が取られ授業時間に食い込む等の状況が生じている。
- 教科担任制をはじめとする小中一貫教育の柱となる様々な取り組みには、担当教員の努力とやりくりなくしては進められない。
- 国際コミュニケーション科の英語活動や「生き方」学習は、担任する教員の工夫と努力などで行われている。
- 中学校の生徒会に 5-6 学年を参加させたり（生徒総会への出席）部活動参加など、異学年交流は小規模（全校 20 名程度）ながら取り組んでいる。

（２）成果と課題

生活指導面

１）児童生徒の全般的状況

- 中学生に進学して新たな不登校、欠席しがちな生徒はいない。
- 不登校の子どもは、小学校には殆どいないが中学校には各学年 1～2 名いる。

２）児童生徒と教員の意識（小中一貫校意識調査【平成 26 年度】より抜粋）

● 児童の意識調査

「学校に行くことが楽しいか」

- 4 学年で「あまり」が増える傾向にあり、5-6 学年でそれが維持されるが、9 学年で「とても」と「やや」の合計で 89.8%と高い。興本扇学編と同様に中学年生の「中だるみ」と高学年の「伸び」という小中一貫学校の特徴と捉えることができる。

「自分のよいところを伸ばそうとがんばっているか」

- 平成 20 年度入学児童において、「とても」「やや」の合計が 6 学年で低下する以外は高い数値で維持されている。平成 20 年度に 4 年生であった児童生徒は 8-9 学年でもその傾向が改善していない。興本扇学園と比べて、「とても」「やや」の合計が 10 数ポイント低くなっている。大規模校の影響で自分の得意、良さを発揮する場面が少ないことなども影響しているのか検討を要する課題である。

● 教員の意識調査

「小中一貫教育を通して、自身の児童・生徒への理解や見方は変わったか」

- 児童・生徒理解や見方が「とても」、「やや」変わったとする回答率が、創設時から比較すると全体として増加の傾向がある。一方で、「あまり変わらなかった」、「全く変わらなかった」の割合も 30 数%～40%前後で、「とても変わった」とする回答率が、興本扇学園と比較すると全体的に低い。

（原因）小学校教員の方が変わらなかったとする回答率が高いのは興本扇学園と同じであるが、大規模校であるため、興本扇学園以上に、小中一貫教育の取

り組みに困難を抱えていることが起因しているかどうかは検討を要する。
「異学年交流で児童生徒の成長に変化が見られたか」
→ 一貫校創設当初は、異学年交流で児童生徒の成長変化を評価する割合は非常に高かったが、経年変化で観察すると評価する率が低い。
(原因) 平成 25 年度以降に第一校舎(5-9 学年)と第二校舎(1-4 学年)に分離したことで、異学年交流の取り組みが困難となり成果も見えにくくなった可能性がある。

学習指導面

小学校は区の平均と比べて低い部分もあるが、中学校に上がり学年を重ねると高くなる傾向にあり、中学校の学力の伸びが顕著となっている。また、全国学力調査の数学 B 問題などで示されたように、国の平均や都の平均を上回るなど、活用型の学力定着が進んでいる。国際コミュニケーション科をはじめとする活用・探求型学習の成果が現れ始めていると考えられる。

- 平成 26 年度 通過率
新田小：国語(73.7) 算数(81.0) →新田中：国語(71.6) 数学(65.4)
《伸び率》国語(97.2%) 算数・数学(80.8%) **計 88.6%** (区平均は 77.7%)
- 平成 26 年度 正答率
新田小：国語(78.1) 算数(82.3) →新田中：国語(64.8) 数学(64.2)
《伸び率》国語(83.0%) 算数・数学(78.0%) **計 80.5%** (区平均は 82.8%)
- 平成 27 年度 通過率
新田小：国語(75.5) 算数(76.7) →新田中：国語(65.5) 数学(61.4)
《伸び率》国語(86.8%) 算数・数学(80.0%) **計 83.4%** (区平均は 72.2%)
- 平成 27 年度 正答率
新田小：国語(78.0) 算数(81.4) →新田中：国語(70.0) 数学(67.8)
《伸び率》国語(89.7%) 算数・数学(83.3%) **計 86.4%** (区平均は 81.2%)
- 英語の学力が高い(平成 27 年度調査)
通過率：中学 2 年(**64.8%**) → 中学 3 年(**73.8%**)【区平均 中 2(46.7%) → 中 3(51.2%)】
正答率：中学 2 年(**69.6%**) → 中学 3 年(**76.4%**)【区平均 中 2(52.0%) → 中 3(40.6%)】

足立区基礎学力に関する総合調査より

	7 学年	8 学年	9 学年
在籍	94	96	88
1 級			
準 1 級			
2 級			2
準 2 級	1	1	12
3 級		9	28
4 級	9	15	3
5 級	9	4	3
3 級以上取得人数	1	10	42
3 級以上取得率%	1.1%	10.6%	44.7%

英検取得状況(平成 27 年 12 月 2 日現在)

【国語B：主として活用】						
分類・区分別集計結果						
分類	区分	対象級 人数 (人)	平均正答率(%)			
			本校	区	東京都	全国
学習指導要領 の領域等	話すこと・聞くこと	3	77.0	67.6	72.7	72.2
	書くこと	3	39.8	32.3	37.9	36.7
	読むこと	6	68.4	59.8	64.1	62.6
	伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項	0				
評価の観点	国語への関心・意欲・態度	3	39.8	32.3	37.9	36.7
	話す・聞く能力	3	77.0	67.6	72.7	72.2
	書く能力	3	39.8	32.3	37.9	36.7
	読む能力	6	68.4	59.8	64.1	62.6
	言語についての知識・理解・技能	0				

【数学B：主として活用】						
分類・区分別集計結果						
分類	区分	対象校 数(校)	平均正答率(%)			
			本校	区	東京都	全国
学習指導要領 の領域	数と式	4	71.2	58.5	64.5	63.2
	図形	4	50.6	36.0	42.6	39.0
	関数	5	43.7	28.4	32.9	30.7
	資料の活用	2	40.1	28.0	33.7	31.2
評価の観点	数学への関心・意欲・態度	0				
	数学的な見方や考え方	13	53.6	39.8	45.1	42.8
	数学的な技能	2	44.8	29.3	37.1	34.2
	数量や図形などについての知識・理解	0				

平成 27 年度全国学力学習状況調査

児童生徒と教員の意識（小中一貫校意識調査【平成 26 年度】より抜粋）

- 児童生徒の意識

「毎日の授業がわかる」「国際コミュニケーション科の授業は、ためになったか」

→ 児童生徒は、授業理解や国際コミュニケーション科に対して肯定的に評価する割合が全般的に高い

- 教員の意識

「一貫校を開校後、以前と比較して指導内容・方法の工夫・改善をしたか」

「小中一貫教育が導入されてから、学力についてどう感じるか」

「国際コミュニケーション科の実施で望ましい変化が見られたか」

→ 教員の回答の傾向は興本扇学園と同様の傾向である。しかし、平成 25 年度以降、肯定的な評価が 20 ポイント前後低い。

（原因）児童生徒数の増加による校舎分離が影響している可能性あり。校舎分離で第二校舎（1-4 学年）担当教員に小中一貫教育の活動や意識の変化が生じたのか、さらに検討する必要がある。

「国際コミュニケーション科による児童生徒の望ましい変化がみられたか」

→ 「とても」「やや」の合計が 20 ポイント前後高い。

（成果）英語活動の成果として英検合格者数が増加してきている等、目に見える成果として確認できている。

3 現況の評価について

2 つの小中一貫学校の現況評価と今後の課題

課題

- 興本扇学園 校舎分離型の小中一貫校である

新田学園 児童生徒数の急増と実施的な校舎の分割

- 小中一貫教育を推進できる人員体制

→ 小中一貫教育導入当初は、交流授業担当教員は、週当たり担当授業時数を少なくするなど教員の授業負担軽減があった。その後、様々な学習指導の取り組みが行われる中で、全体的に教員の負担過重・多忙化が進み、小中一貫教育を取り組むための支障が大きくなった。

特に、教科担任制や小中一貫の体系的な教育課程・授業づくり、国際コミュニケーション科を中心とした取り組みが、教員の個人的努力や頑張りに支えられる状況である。

- 両校とも、中学年生の「中だるみ」が共通して顕在化する

評価点

- 日常的に小中一貫教育を意識した小・中学校の教員、児童生徒の交流は様々に行われている。

- 小中一貫教育学校の基本的枠組み（5-6 学年の教科担任制、国際コミュニケーシ

ョン科、異学年交流など)を活用した取り組みも課題を抱えながらも継続して進められている。

→両校とも生徒指導面では児童生徒が落ち着いた学校生活を送り学習にも意欲的に励んでいる

- 「中だるみ」が自分を見つめ直す時期であり、その後の高学年での「伸び」につながっている
- 学力面では、両校ともに、小学校では全体的に学力が決して高いとは言えないが、中学校に進級し学年を重ねるにつれて学力が高くなる傾向にある。
- 中学校での学力の伸びが顕著であり、英語の学力の伸びが著しい。